

伊藤祐二（作曲家）

ユー・ジ 芹に

気をつける

旧知の信頼のできる音楽学者に、「芸術音楽」は、もう終わるのか？と問うたところ、「はい」と即答。（もちろん、言葉の定義と若干の保留が続くが。）「現代音楽」の「終焉」を説く者も多い。終わるのなら終われば良いと思うが、しかし「問う」事をやめた時、人は終わる、とも思う。キム・ヨハンには注目したい。

キム・ヨハン 作曲個展

曖昧・複雑・偶然・・・間の聴取

2021年9月13日 両国門天ホール
プログラムノートを一切読まずに全曲を聴いた。新鮮だった。魅力的だった。何をどう聴くか耳は迷わされ、やがて、様々なレベルで、そこら中に、音楽を発見する新鮮な楽しさ！ 近年無かったなあ、と思う。すぐれた作品を楽しむ事は今も多いが、新鮮、とは違うし、それ以前に、うんざりする事が多い……。終演後、プログラムノートを讀んだ。新鮮だった。批評性が明確、仕掛けがあつて、実際の聴体験をはつと照らした。こ

れも、近年無かったなあ、と思う。それ以前に……。

ファゴットソロ [Co-reference]

分解された状態の楽器を、演奏しながら組み立ててゆく。同種の作品にありがちな、新奇さ、不安定な音響、組み立ての演劇性、楽器完成時のカタルシス、等に、決して寄りかからない。耳は、極度に不安定で、複雑、繊細な音の森に分け入り、「完成形に至るまで演奏を続けていくナラティブ」（プログラムより・以下同）を確かに追っていた。

チューバソロ [De-reference]

（後からプログラムで仕掛けを知った訳だが）純正律で鳴る（前提の）チューバの音を、オートチューンで平均律に変換してスピーカーから返し、生音と重ねる。耳は、微妙な唸りを伴う、曖昧で繊細で奇妙な音を楽しむが、曲は決して「音響を聴かせる」事に寄りかからず、朴訥に、様々な語る。（作曲者の意図の外かもしれないが）ユーモラスに感じて笑ったような部分もあつた。「平均律と純正律という基準を『逆参照』！」（声高に言われがち）平均律、純正律、ライヴエレクトロニクス、等の要素は、どれも特権化される事無く「上下関係なく同じレベルで感じ取れる

音体験、確かに、すべては一本のチューバの音楽に集約され、不思議な楽器として鳴っていた。

全曲についても書く字数は無いが、アンサンブル曲でも、耳は迷い、やがて、様々なレベルに「音楽」を発見し、次に何が発見できるか、30分間ずっとわくわくし、新鮮な時を過ごした。ピアノソロ曲は、ピアノ曲の作曲の難しさを感じさせたが、チェロソロの曲は、本当に美しかった。配信では、全く伝わらないだろうけれど。バードコール一つで、瞬時に世界を拡張してみせる手際も鮮やかだった。

現代音楽の世界で擦り切れてしまったものごとを、「逆参照」するキムの批評性は、（今や残念ながら、批評性がある事自体……）とても新鮮。そしてその仕掛けは実際に音楽として聴かせる力をキムは持っている。若きキム・ヨハンの今後の展開が本当に楽しみだと思う。

これもぜひ書いておきたいが、演奏者の寄与するところも大きかった。よくある、現代音楽スタイルの指なりフレーズも一切なく、とても誠実な探求だった。演奏は、中川ヒデ鷹(中) 坂本光太(Tub.) 北嶋愛季(Wc.) 井上郷子(Pr.)の各氏。